

---

# 平凡な姫と美形な王子様。

アカリ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

平凡な姫と美形な王子様。

### 【NNコード】

N6378P

### 【作者名】

アカリ

### 【あらすじ】

とある王国で結婚の話が持ち上りました。  
え？ まだ結婚する気、ないんですけど？

戸惑うヴィオラを余所にして結婚の話は進みます。

舞台は「」、バウムガルド王国。

王が国を治める、平和な国とのある少女のこと

……

廊下がなにやら騒がしい。

バウムガルド王国の国王は執務中にふと顔をあげた。

「……さまーーまーから、ーー！」

「待つも……だか……！」

何か言い争つていてるよいつな声が聞こえる。

その声はだんだんと大きく鮮明に王のもとに聞こえるよいつになつ

た。

王の横に控えている騎士も眉をひそめて扉の外を窺つている。

「父様！ 一体どういうことなんですか！」

「……ああ、ヴィオラか。挨拶もなしに入つてきてしまいかんだら。お前がいくら私の娘だからといつてもちゃんとするよいつに。親しい仲にも礼儀あり、という言葉もある。」

「…………失礼致しました。父様。」

そう言つて扉を勢いよく開けて入つてきたこの国の姫、ヴィオラ  
ヴィオラ・ティル・バウムガルドは王に礼をした。

王国の姫としては当然とも言えるものではあるがその仕草は優雅で完璧なものであり、父を納得させるものでもあった。

薄茶色の髪の毛は肩より少し長いといったところだらうか。

一般的の女性よりも少し短めの髪、菖蒲色の目をした娘。

菖蒲色の美しい目の目は王の最愛の妻、王妃の目の色を受け継いだものであり、紫よりもちょっと色の濃いそれを見るのが王は好きだった。

王妃の面影を感じる美しい顔に抜群のスタイルであることから求婚の手紙がたくさん届くのはヴィオラの姉であり、本人は客観的に評価するのならば「平凡。良くて中の上。」という姿勢であった。

顔をあげたヴィオラは早速ここにやってきた目的を果たすために口を開く。

「私に縁談がきていたところを聞いたのですが。」

「縁談だったらいつもどこかしらから来ているだらう?」

「今回に限つてどうかしたのか?」

「ええ、いつも来ていることは知っています。それに、断つてくださっていたことも。

なのに、何で今回の縁談は受けたのですか?」

「……知つていたのか。」

「シルヴィア、侍女から聞きました!」

そう言つてヴィオラは鼻息荒く父を睨んだ。

睨まれたほうは「問い合わせたのか。……まだ口が軽いな。」と言いい、涼しい顔をしている。

「ヴィオラ、お前ももう一つだ。身を固める時期なのはわかつて

いるだろ？」「

「それは承知しております。」

「いくら嫌がるが、この国の姫であることには変わりない。つまり、この国の利益になることために結婚をすることが必要だつた。」

「はい。」

「我が国の王位継承権は男子にしかない。つまり、次期王となるのはお前の弟。」

「それも理解しております。」

「だが、いくら戦略結婚としても私だって父親だからな、娘には幸せになつてもらいたい。」

「……はあ。」

はじめのうちは「王として」というかんじの厳格な雰囲気で話していた王に相づちを打つヴィオラであったが、だんだんと「父親として」「可愛い娘を持つ父として」というかんじに変わってきたのを見つづ、ヴィオラはそのまま王の言い分を聞き続ける。

「そこで、厳選に厳選に厳選を重ねたのだ、お前の伴侶の候補を。」

「……それで残ったのが……？」

「いや、それで厳選したら誰もいなくなつてしまつた。」

「だから來ていたものは全て断つたよ。」

「……は？」

王の話のペースにのまれてしまつて、ヴィオラは話を聞き続けることしかできない。

そんなヴィオラに気づかず、王は更に話を続ける。

「それが今から一ヶ月と半月前のこと。結婚相手がないんじや

しょうがない、

もう暫く、ヴィオラの結婚話はなしかな、と思つたその時…

「その時？」

「私の知人から来た手紙があつたんだよ。」

「その知人というのがオビディオ小父様のことですか？」

「その通り。オビディオからの手紙には息子の結婚の相手が居なくて困つてゐる、

と書いてあつた。

そこで閃いたんだ。 私の友であるオビディオの息子、評判は上々！

「彼ならヴィオラを任せることができる…」

「（閃かなくて良かつたのに……）」

ヴィオラは内心そう思つたが、ノリノリな父に何を言つても無駄だろうと思いそれは口にしなかつた。

オビディオといつ人物はこの大陸で一番大きい国を治めており、父の古くからの友人で時々このバウムガルド王国にも訪問してくる。彼は優しくて小さかつたヴィオラにも親切にしてくれた。オビディオのことをヴィオラは素敵な小父様であると思つてゐる。だが、今回問題になつてゐるヴィオラの婚約者となつた（なつてしまつた）彼の息子 フォルクマールのこととなると話は全く違う。

フォルクマール。オビディオの次男で、年齢はヴィオラより2つ年上、19歳。

容姿はこの大陸でも有名なほど優れており（これはオビディオの子供達間に言えることらしいが）、剣の腕も國の中で有数だと聞いている。

父に似たのだろうか、頭もいいという評判も。

容姿端麗、頭腦明晰、剣の腕も文句なし。温厚な青年。……とい

うのがヴィオラが聞いたことのあるものだった。

「（けど、絶対そんなことない！ みんな、だまされているんだわー）」

フォルクマールはオビディオと共にバウムガルド王国に小さい頃からよく来た。

同世代の男の子というものは（弟を除くとして）いなかつたヴィオラは緊張しながら彼に話しかけたのだ。

オビディオの息子だということから小さかったヴィオラはフォルクマールもオビディオみたいに優しい人だと思つた。

が、それも一時のこと。

今はアレはお腹が真っ黒の詐欺師だとヴィオラは叫びたい。しかし、それを言つても信じてくれる人はいないに違いない。

彼の家族は知つてているとは思うが。

フォルクマールは外面だけいいのだ。

自分みたいな平凡女がそやつて言つたところで「どうせ振られた逆恨みだろ」とか「彼の気を引きたいだけだな」とか、悪いところでは「妄想癖が？」とか色々と糾弾される。確実に。

「……ということで婚約が決まった。」「私の意志は……」「さつきも言つただろ？ これはあくまでも戦略結婚なんだよ。」「けど、」「この話はすでに決まったことだ。……もう一ヶ月も前に。」「そんなに前から……。」

自分が聞いたのは今日だったからせいぜい2・3日前のこととかと

思つたのに！

俯いたヴィオラはあることを思いついて顔をあげた。

「フォルクマール様の意志はどうなんですか？」

「そうですよ、彼は人気だと伺っております。

彼には私みたいな平々凡々な姫よりもっとすばらしい方がいらっしゃいます！」

「いや、フォルクマールくん本人から返事が返ってきたから問題はない。」

「本人からつて……父様、だつたら……」

本人から帰つてきた返事ならなおさら、自分との結婚なんて向こうだつてごめんだつただろうから断りの返事だつたんじゃないのか？

そう思つたヴィオラに王からの言葉は驚きを隠せないものだつた。

「 そのお話、有り難くお受けします。 つてな。」

「つえ！？」

フォルクマールが、あのフォルクマールが何で自分との婚約を受け入れたのか？

嫌がらせ？ それともフォルクマールにくる求婚のお相手はそんなにひどい人ばかりだつたのか？

そこで嫌な考えがヴィオラの脳裏をかすめた。

いや、そんなはずは。でも、それ以外にこの話をフォルクマールが受け入れるメリットを思いつかない。

「（……生け贋、だよね、完璧に。いやーなお姫様方に対する……）

生け贋、人身御供、貴い犠牲。…… フォルクマールなら私には「貴い」なんてつけないだろう。じゃなくて。

フォルクマールの本性を知っている人間は限りなく少ない。これは本人が言つてたから間違いない。

彼が王子として生活している国は大きい。

つけ込もうと自分の娘を送つてくる貴族やら、他の国のオヒメサマも少なくはない。彼自身の魅力も相まってすゞしいことになつている。

多分彼は面倒くさくなつたに違いない、温厚な顔をして断ることが。

ヴィオラとの結婚話を聞いてこれ幸いとでもこうよつて返事をしたのだろう。

「フォルクマールくんも見る日があるつてものだよ！」

「じゃあちゃんと準備しておくんだぞ？」

「ちよ、ちよっと父様！ 話が途中です！ つてイエル、ロター  
ル！」

「まだ話は終わつてな……」

話を切り上げる形でヴィオラを無理矢理退出をさせた国王はヴィオラが出て行つた（正しく言うと近衛兵に引っ張られていつた）扉を見、ため息をつくのであつた。

「久しぶりだね、ヴィオラ。

いや、折角婚約者になつたんだからヴァイオラつてちゃんと呼ぶべきかな？」

「……お久しぶりです。フォルクマール様。」

笑顔をうかべて声をかけてきたフォルクマールの言葉の半分くらいを無視するような形で返事を返した

ヴィオラの言葉に特に反応することなく、フォルクマールはヴィオラの手を取るとそこに軽く口づけ、ヴィオラを試すような目つきで見てきた。

見かけることのないレベルの整つた顔立ちのフォルクマールにヴィオラの後ろに控えている女官達がざわめく。  
更には羨望を含んだ目線を感じた気がした。

そんな様子を楽しんでいるように見えるのは自分だけなのか、と  
ヴィオラは顔が引きつりそうになつたがそこは姫としてこれくらい  
なんともないよつに見せかけるためになんとか表情を保つ。

「つれないね、久しぶりに会つたというのに。僕のヴァイオラ、  
愛しい人？」

「…………（）の野郎！ そんなこと思つてないだろーーー！」

特に目立つた反応がヴィオラからなかつたからだろうか、フォルクマールは握つていたヴィオラの手をそのまま自分の方に引き寄せた。

たらを踏んだヴィオラにフォルクマールは顔を近づけるとさつきよりも低く、甘い声でヴィオラに話しかけてきた。

その瞬間に刺すような視線が倍増する。言葉で表すならば「婚約者に選ばれたからつて調子のつてんじやねえぞ、オイ！ 羨ましすぎるわーーー」「くらこなものが、と頭の片隅で冷静な自分が言った。

「この年になるまで色恋事に全くと言つていいくはゞ無縁だったヴィオラは顔が赤らむのを隠せなかつた。

「 フォルクマールはその様子を見て愛おしげに手を細める。……よう見えるんだろうと計算しているのではないかとヴィオラは疑つた。

「恥ずかしいので顔が赤くなつたが、決して、決して！ フォルクマールに惚れているわけではないと明言したい！！

色々と理不尽に思つたがそれを口に出すことはせず、むしろその気持ちをフォルクマールを無理矢理引きはがすエネルギーとしてフォルクマールから距離をとつた。

「長旅でお疲れだと思います。」 これは落ち着きませんよね。シリヴィア。

「この突き刺さるような視線から逃れることにした、ヴィオラは侍女に命じて部屋にフォルクマールを案内させることにした。自分は挨拶したのだからもういいだろう、つていうか勘弁してくれどヴィオラはシリヴィアがフォルクマールを送るのを見届けてすぐには自室に引っ込む気満々だったのだがせつを払つた（といつても過言ではない）手にそれを阻まれる。

「一緒に来てはくれないかい？ 話したいこともあるんだ。」「……はい？」

返事は語尾に疑問符がついていたものであつたのだがそんなことをまるで気にしていないフォルクマールはヴィオラの手をとり、侍女に案内される部屋へと歩いて行つたのだった。

「 僕が君を生け贋にしたと思つてるかい? 」

「 それ以外にこの話を彼方がわざわざ了承する理由がないと思つています。 」

案内された部屋についたフォルクマールは人払いをさせるように命じると、部屋に一人きりになつた状態でヴィオラに声をかけた。即答とも言える早さで返事を返したヴィオラをフォルクマールは鋭い目つきで見てくる。

「 へえ。僕がそんなことするとと思つてるの? 君の僕に対する認識がわかつちゃうなあ。 」

「 ……認識、と言われましても。 」

「 それ以外の理由、ないと思つてる? 」

「 はい。 」

違いますか? とさつきの仕返しといつよつに挑発するヴィオラにあつさりとフォルクマールが答えた。

「 それがなかつたつて言つたら嘘になるけど。本当の理由は違つ

よ。 」

「 ……え? 」

本当の理由? それ以外に何があるつて言つんだ?

選り取り見取りな結婚相手をやめて、平々凡々な自分にする理由が?

いつもどじこか違う態度なのには何かしらの理由はあると思つた  
ど……?

ボソッとフォルクマールが何か言つた言葉を聞き逃し、もう一度聞こうとする前にいつの間にか近づいていたフォルクマールに抱きしめられた。

「…………？」ちよ、え、どうしたんですか、」

「…………だからだよ。」

「は」

「ヴァイオラ。僕の、僕だけのお姫様。好きだから、僕の結婚相手に選んだんだ。」

さつき出迎えた時と同じような、でも少し違う声で、表情で、フォルクマールはヴィオラに告げた。

先程言っていた言葉は完全に演技だと思つていたので流せたが、今度は違うと思った。

わざわざ2人だけでいるところでこんなことを告げる必要を感じない。

普段、自分のことを「ヴァイオラ」と呼ばない、人の名前を呼ばないフォルクマール。これもまた、演技？

戸惑つて何も言わないヴィオラの顔をフォルクマールはじつと見つめる。

「ただの、幼なじみだと思っていたんだ。

ああ、ちょっと違うかな、『利用可能な』幼なじみかな。

僕のところに結婚の話が多くなってきて、誘惑でもするようになる人が出てきて。

だから僕が結婚してもいいと思えるような姫が現れるまで

婚約者になつてもらおうかなつて軽く考えてた。

でも、実際にヴァイオラのところに結婚の話が来るようになつて言つことを

たつて言つことを

聞いたとき、……自分でもやばかったな。

で、気づいた。『利用可能な』なんてもんじゃなかつたんだ。

『大切な』幼なじみ、いや、僕の好きなひと。

自覚したら僕はヴァイオラ以外と結婚するなんてありえないと思つたし、

ヴァイオラが他の男と結婚するなんて耐えられないと思つた。

自分の言葉に頬を染めている姉を見て微笑む。

「ヴァイオラ、僕が守つてあげるから。脅かすものは全部排除する。君以外いらない。

だからその代わりに。」

ヴァイオラの耳元に口を近づけると願うように囁いた。

「ヴァイオラの、全てを。僕に頂戴？」

そこまで言つと、フォルクマールはヴァイオラの頬に手を添え、顔を近づける。

家族以外の男に抱きしめられたことも、ましてや口説かれたこともないヴァイオラは話の展開に全くつじていけてなく、ただ動きを止めている。

ヴァイオラがものを考えられるように戻つたときにはフォルクマールの顔と自分の顔があと数センチなことに気づいた。

「つへ!? うわあ！」

パニックになつたヴァイオラは、体勢をどうにかしようと田の前にあつたフォルクマールの体を思いつきり突き放した。

このタイミングで突き飛ばされることを予測していなかつたフォルクマールはあっけなくヴィオラに突き飛ばされ、尻もちをつく形となつた。

「あ、お断りします！ 私に結婚は早いですからーー！」

言ひやいなやヴィオラは部屋を出、走り去つてしまつた。  
突き飛ばされたフォルクマールはしばし固まつたが、やがてクスクスと笑い、終いには大声で笑い始めた。

「 逃がさないよ？ 僕のヴァイオラ。 」

笑い終わつたときに言つたその言葉と表情に何があつたのかと部屋に入つてきた警備の兵達は悪寒を感じたらしい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6378p/>

---

平凡な姫と美形な王子様。

2011年2月19日08時41分発行